

文学倫理学批評の「人類文明三段階論」：自然選 択・倫理選択・科学選択

任, 潔
中国・浙江大学外国語学院：副研究員

<https://doi.org/10.15017/6790837>

出版情報：九大日文．41, pp.43-53, 2023-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



◎コラム

文学倫理学批評の「人類文明

三段階論」

——自然選択・倫理選択・科学選択

REN
任 潔

改革開放政策が実施されて以降、中国の学術界では西方からの文学理論と批評方法を積極的に吸収する態度が見られ、外來の文学理論が共存する状態にある。しかし、西方からの文学理論と批評方法の影響を受けた結果、中国における文学批評は文学から遠く離れており、理論コンプレックス (Theoretical Complex)、命題コンプレックス (Preordained Complex)、術語コンプレックス (Term Complex) の傾向が著しくなり、倫理的価値よりも文学作品における美的価値が重視されている。さらに、市場経済の影響の下で倫理的価値が排斥され、文学作品の商品としての価値を強調する傾向が見られる。こうした学術的ないし時代背景のなか、文学倫理学批評が二〇〇四年十月に聶珍釗氏によって提唱された。

文学倫理学批評とは、倫理の視点から文学を分析・解釈・鑑賞し、文学の倫理的価値と教化的機能を汲みとる批評方法である。方法論の構築とそれを文学批評に適用することに最初から

力を入れており、アメリカの倫理批評とは異なる特徴を示している。また、西洋の倫理批評をそのまま移植したものではなく、参考にしつつ革新を行ったものであり、倫理選択 (ethical selection) を基本理論として「人類文明三段階論」を提起した。それは自然選択 (natural selection)、倫理選択、科学選択 (scientific selection) という三つの段階である。自然選択は人間の形態上の問題を解決し、「我々はどこから来たのか」という問いに答える。倫理選択は人間の本質な問題を解決し、「我々は何者か」という問題に答える。そして科学選択は人間の科学化の問題を解決し、「我々はどこへ行くのか」という問いに答える。自然選択の方法は自然進化であり、弱肉強食を法則とする。倫理選択の方法は倫理教誨であり、倫理を学ぶことで人間になる。科学選択の方法は科学技術であり、技術の更新を手段とする。「人類文明三段階論」の提起は、人類文明の起源などの問題を根本から明らかにするだけでなく、将来の人類文明の発展方向を明らかにする。

周知の通り、日本文学史上における代表的な作品は多少とも倫理的な要素が含まれるため、文学倫理学批評によって日本文学を改めて分析することが可能だろう。西方の倫理批評や中国の伝統的道德批評と比べて、文学倫理学批評は独自の特徴を有している。それを日本文学研究に適応すれば、以前と異なる結論が出てくるだろう。特に、人類文明の発展に対して文学倫理学批評は「人類文明三段階論」を提唱し、新たな見解を持つため、従来日本文学術界で盛んに行われた推理小説研究やサイエンス・フィクション研究にも新風を吹き込むことだろう。

一、自然選択…文学の起源

起源から言うと、文学は「特定の歴史段階における倫理観念と道德生活に対する独特の表現様式であり、本質的には倫理に関する芸術」⁽¹⁾である。人間は理性を発達・成熟させる過程で、実践活動によって創られた文字を利用して自分の認識・理解を記録し、それにより最も古いテキストが生み出された。初期の段階では、人間は自分自身を抽象的に認識しえないままであったが、理性の成熟につれて、実生活の中で直面する問題が次第に増えていった。例えば、発生した病気や自然災害をどのように解釈するのか、物事の価値をいかに判断するのか、生活様式をどう選ぶのかなどである。その中でも特に重要なこととして、人間自身をどのように理解するのかという問題がある。人間は様々な問題を抱えるが、それらはすべて、人間が徐々に理性で考えるようになってきたために生じた。蒙昧から文明へと歩んできた人間にとって、このような問題は考える必要があるのみならず、それに対する答えも明確に出されなければならなかった。文字が生み出される以前、人間はいかに考え、解釈したのだろうか。それは資料不足で検証することが困難である。しかし、幸いなことに、個人の生活や考え方を記録できる文字が創られて以降、人間は、文字で構成されたテキストを通して自分の素朴な理解を表現できるようになった。だからこそ、今われわれはテキストを通して人間がいかに蒙昧から歩んできた

のかを知ることができるようになった。

人類文明が発展する過程において、人間が直面した最大の問題は何かであつたろうか。それは人間と獣を区別して認識すること、人間かあるいは動物かという自らのアイデンティティを選ぶことである。この問題は、人間の進化にしたがって自然に生じてきた。十九世紀半ば、ダーウィン(Charles Robert Darwin)は進化論を確立し、自然選択によって全生物界の誕生・発展に科学的な解釈を与えた。進化論の観点から人類を考察すれば、人類文明の誕生は人間自身が自ら選択した結果である。人類文明の長い発展史の流れの中で、人間はすでに二回の自我選択を行った。猿から人間へ進化する選択は、人間の進化過程における第一の選択―自然選択―である。これは生物的选择にすぎない。その選択により得た最大の成果は、人間が人間という形式、つまり人間の外形を持つようになったことにある。例えば、立つて歩くための足、道具を使う手、合理的に配列された五官と四肢などである。それにより、人間は自分の形式によってほかの動物から区別することができるようになった。

しかし、第一の選択は、人間とは何かという問題を根本的には解決できなかった。すなわち、本質的には人間を獣から区別できなかった。ダーウィンの言うように、「自然選択の文明的民族と文明国における影響は――今まで私はただ人類が半獣の状態から野蛮人へと移行する段階しか考えていなかった」⁽²⁾。

ダーウィンは、自然選択と進化に関する理論を打ち立て、また人間が低級な生き物と同様に持つ同源的構造の概念を導入して人間の進化を論証したが、人間が人間である原因、すなわち人

間とほかの動物との本質的な区別がどこにあるのかについては明確に答えを出せなかった。では、自然選択を経た人間が一体何によって自らを獣から区別するのかという点、それは倫理選択である。つまり、第一の自然選択の段階が終わったあと、第二の倫理選択の段階に入るわけである。そして、第三の科学選択の段階を加えると、完全な人間文明発展のプロセスとなる。

エンゲルス (Friedrich Engels) はかつて人間の起源について全面的に論じたことがある。そこでは、ダーウィンの進化論を発展させ、労働によって人間が創り出されたという科学的理論を提示した。1866年、エンゲルスは『猿が人間になるにあたっての労働の役割』⁽³⁾という文章を書き、その中で人間が動物から別れた根本的な原因が労働にあることを指摘した。エンゲルスは、猿が人間へと進化していく過程を以下のように説明した。まず、太古の類人猿は、最初は群れで熱帯と亜熱帯の森林に生息していた。食物を探すため、その一部分は地上に降りて活動しはじめ、次第に二本足で直立して歩けるようになった。そうすると、前肢が開放され、石や木の棒などを使えるようになり、ようやく最後に手で道具を作るまでに進化した。同時に、大脳をはじめとする様々な器官が大きく発達し、様々な人間的特徴が現れた。エンゲルスは、木の上で生活する原始の猿を「木に登る猿」⁽⁴⁾と呼び、猿から人間へと移行中の生物を「形成中の人間」⁽⁵⁾と呼んだ。エンゲルスはダーウィンの進化論を堅く信じていた。人類の祖先は高度的に進化した類人猿から移行してきたものであると考え、労働が猿を人間へと進化させる決定的な力であると指摘した。エンゲルスの議論の核心は、労働が

猿を人間へと進化させる過程で果たした役割を強調するところにある。手こそが労働の産物であり、その発達が全身の筋肉にも変化を引き起こした。その後、労働の中で言語が生まれ、言語がまた労働とともに猿の脳髓を人間の脳髓へと発達させた。労働は人間が猿から移行してくる過程において決定的な力であり、重要な役割を果たしたのである。

エンゲルスは、ダーウィンとは異なり、人類を動物と区別する根本的な特徴についての問いにも答えた。「人類社会が猿の群れと区別する特徴は何であろうか。労働がそれである」⁽⁶⁾。真の意味での労働は、道具を作るときに始まったのである。道具を持つようになって初めて、人間は各種の複雑な労働を行うことができるようになり、ますます高い目標を打ち出し、達成することができるようになった。労働そのものは、人類の発展とともに更に変化していった。より完全に近づき、より多様化したのである。人間は、牧畜や狩猟のほかに、農業も始めた。農業以後も、紡績、冶金、製陶などの様々な手工業が現れた。その後は商業、最後に芸術と科学が現れた。エンゲルスの考えでは、「動物はたまた外部にある自然界を利用して自我によって自然界を変えるしかできないが、人間は自分を変えることによって、自然界を自分に適合させ、そして自然界を支配しようとしている」⁽⁷⁾。「これこそ人間をほかの動物と区別する最後の本質的な違いである」⁽⁸⁾とエンゲルスは強調している。

エンゲルスは、猿が人間へと進化する過程で果たした役割を考察し、労働の概念が、人間が猿から進化してきた過程に決定的だったことを説明した。労働に関するエンゲルスの理解は生

物進化論を超越することはできず、ただダーウィンの自然選択の理論を具体化したものではあるが、人間が具体的にどのように猿から進化してきたかをよりよく理解させる。人間が猿から進化する過程において、労働が果たした重大な役割を疑う余地はない。しかし、労働は人間そのものではなく、ただ人間が進化してくる過程で必要となる一つの外部条件であり、あるいは人間の持つ一種の能力にすぎない。したがって、労働の概念によつて説明するのは、人間を猿から区別する間に真正面からは答えていとは言えない。進化した人間には、なぜ進化中の猿及びほかの動物との本質的な区別があるのか。これは、エンゲルスの答えられなかった問題であり、そして、労働という概念だけでは説明しきれない問題でもある。このことから、エンゲルスは、ダーウィンと同様にただ自然選択の理論を援用して人間がどのようにして今まで進化してきたのかという問いに説明を与えただけで、人間とほかの動物との本質的な区別がどこにあるのかという問題を解決していなかったことが分かる。

二、倫理選択…人禽之弁

人間と動物との本質的な区別は一体どこにあるのか。この問いに答えるためには、われわれは再びダーウィンの自然選択という觀念に戻らなければならない。人間は、長い年月を経て進化してきた。ダーウィンは、人類の誕生も含めて、生物はそれぞれの環境下に生きており、時が経つにつれて進化しながら最

最終的に今のような高級な形態に移行してきたと考えた。人間が猿から進化してきたものであるという判断は、人間が生物的选择をしたことを意味している。すなわち、猿が人間へと進化する過程で、今われわれが人間と呼ぶものの生物的特徴を選んだのである。例えば脳の外形、五官の配列、直立歩行、言語能力などである。自然選択は一種の生物的选择であり、人間がより高い段階へと進化する基礎を築き上げた。

しかし、生物的选择だけを以つて、人間をほかの動物、すなわち人間と対立する存在である獣から完全に区別することはできない。人間を動物から真に分離させたのは、倫理选择である。人間の生物的选择と倫理选择は、異なつた本質を持つ二種類の选择である。前者は人間の形式に対する选择で、後者は人間の本質に対する选择である。『聖書』のエピソードからも、人類の生物的选择と倫理选择がどれほど異なるのがよく分かる。神の創造したエデンの園に最初に現れた人間は、ただ生物学的な人間である。畜生、昆虫、野獣などの生き物とは異なる外形を持つていたものの、知恵もなく、獣とまったく同じ存在である。神のもともとの考えでは、自分と同じ形状を持つ人間を作り、そうして作つた人間に、自分の代わりとして海を泳ぐ魚、空を飛ぶ鳥、地上に生きる動物と一切の爬虫類を管理させるつもりであつた。しかし、実は人間はほかの生き物と本質的な違いがまったくなく、神の意向を実現できない。そして、人間は最後にエデンの園の善悪の知恵の樹から実を食べたのである。知恵を得て善悪を知ることになり、自分を他の生き物から区別し、真の人間となつた。宗教的な立場から離れてこのエデ

ンの園の物語を考察し、これを人類文明の起源に関する寓話として扱えば、人間が文明を発展させる過程において、自分とほかの動物とを区別することの重要な意義をそこに発見することができる。

エデンの園におけるアダム (Adam) とイヴ (Eve) は当初、自分とほかの生き物との区別に気づかなかった。野獣のように全裸で暮らし、空腹になったら木の実を食べ、のどが渴いたら川の水を飲み、自由自在で、心配もなく日々を過ごしていた。エデンの園における人間はただ獣の一部分であり、自分自身を他の動物から区別する能力を持っていなかった。エデンの園の中心には善悪の知恵の樹があり、その実を摘んで食べることは神により禁じられていた。その実を食べると、人間は知恵を得る。知恵を得ると、善悪を分別することができるようになる。イヴは知恵を得ることを望み、知恵の樹から実を摘んで食べてしまった。そして、隣にいるアダムにも食べさせた。こうして、イヴとアダムは善悪の知恵の樹の実を食べ、知恵を得たのである。すると、裸を恥ずかしいと思い始め、照れ隠しのために無花果の葉を編んで裳を作った。アダムとイヴが禁断の果実を盗み食べた罪、つまり人が言うところの「原罪」は、実際は、人間が倫理選択を通して自分を獣から解放した後にも体内にまだ存在しているアニマル・ファクターに対する理解と言えよう。ダーウィンは人間の知性を自然選択により得たものであると考えていたが、理性は倫理選択により得たものであると考えられることも可能である。

アダムとイヴの倫理選択を通して、われわれは以下のことが

分かる。つまり、禁断の果実を盗み食べる前の存在と後の存在の最も大きな違いは、善悪を分別する能力を持つか否かである。『聖書』では、神・エホバの口を借りて、アダムとイヴが禁断の果実を食べたことによつて神と同様に善悪を知つたと解釈している。神は、生命の樹の実を食べた二人が永遠の命を得ることを恐れ、彼らをエデンの園から追放した。アダムとイヴは、善悪の知恵の樹から実を食べて善悪を分別できるようになり、倫理選択を終え、ようやく生物学的な人間から倫理観を持つ人間になった。このことから、善悪を分別できるかどうか、人間であるかどうかを判断する基準になることが分かる。

アダムとイヴの物語の中には、人間が自分自身と獣との相違点を真に認識し、そして自らを獣から解放する過程における倫理選択の重要さが明確に表現されている。ソポクレス (Sophocles) は、『オイディプス王』 (Oedipus Tyrannus) を通して、初めて文学という形式によつて人間の倫理選択を詳しく解説した。人間の倫理選択の本質は、人間が獣かを分けるという点にある。人間が獣かという問題は、その前提として、自分を理性的に認識できるかどうかにある。一体人間は、何によつて人間と獣とを区別するのであろうか。『オイディプス王』——古代ギリシャ人の運命をテーマとしたこの悲劇——を人間の倫理選択の角度から考えれば、ソポクレスがスフィンクスと彼女の謎の助けを借りて表現しようとしたのは、人間が運命と抗争しても敵わないという問題ではなく、人間がなぜ人間であるかという問いかけであることが分かる。

スフィンクス (Sphinx) は、古代ギリシャの神話の中の怪物

である。初めは古代エジプトの神話に現れ、それが紀元前1600年頃にギリシャに伝えられた。彼女はテーベへ行く十字路に座っており、通行人に謎かけをする。もしその人が答えられなかったら、その人は殺される始末となる。スフィンクスの謎は大変象徴的な意味を持つている。朝には四本足、昼には二本足、夜には三本足で歩くものは何か。この謎の答えは、人間である。テーベの人々はなかなか正解を答えられなかったが、ついにオイディプスがその答え——人間を言い当てた。人生の朝には人間はまだ赤ん坊の段階であり、手と足で這って歩くので四本足、人生の昼になると人間は力強く立つて歩くようになり二本足、人生の夜には高齢で体も衰えて杖をつくために三本足で歩く。オイディプスがその答えを言い当てたため、スフィンクスは恥辱のあまり投身自殺をした。人間についてのこの謎は「スフィンクスの謎」と呼ばれ、かつて多くのテーベ人を困らせ、悩ませてきた。現在の視点から見れば、この謎の価値は、その難しさにあるのではなく、われわれが人間を認識するための重要なヒントを与えてくれた点にある。

古代から現代まで、一見やさしそうなスフィンクスの謎に対して、多くの学者が様々な角度から解釈してきた。その観点は人によって異なり、理解した内容と解釈の結果も同じではないにもかかわらず、スフィンクスの謎が人間の本質の探究に関連するという点ではほぼ一致している。この謎をアポロンの神殿に刻まれた意味深い言葉「汝自身を知れ」から考えてみると、スフィンクスの謎が持つ核心的な内容は人間の本质に対する問いかけであることがさらに明確に分かるだろう。ヘシオドス

(Hesiodos) の『神統記』(Theogony) では、スフィンクスはエキドナ(Echidna)とオルトロス(Ortnus)の子供だとされている。スフィンクスの母・エキドナは、スフィンクスと同じく、半神半獣の姿を持つ奇怪な怪物である。上半身は美女で、目のきらきら輝く顔は非常に美しいが、下半身は蛇の形で染みだらけである。スフィンクスの蛇のような尻尾から母親の影がうかがえる。スフィンクスの父・オルトロスは、人間のような外形を持たず、二つの頭を持つ犬のような怪物である。ギリシャ神話の中では、スフィンクスの母親のような、人間の身体と獣の身体が一体となった怪物は珍しくない。例えば、クレタ島の迷宮に幽閉されていたミノータウロス(Minotaurus)、半人半羊の牧畜の神であるパン(Pan)や森の精霊サテュロス(Satyrs)、半人半馬のケイローン(Chiron)などがある。スフィンクスのような、人間の身体と獣の身体が一体となったイメージは、ギリシャの古い神話の中にその源を見つけることができるのである。

古代ギリシャ神話に出てきた人獣一体の怪物は、ちょうど人間が猿から進化してきたことを芸術的に表したものであり、人間が自然選択を終えたあとの最初の姿である。ギリシャ神話に登場した人獣一体の人物の中ではスフィンクスが最も有名で、最も象徴的な存在である。性別から見ればスフィンクスは女である。彼女は長い髪の毛を持ち、ライオンの体、鷲の翼、蛇の尻尾を備えている。人間の身体と獣の身体が一体となったこのスフィンクスは、人間であろうか、獣であろうか。生物的选择を終えて未開の状態から脱したばかりの古代人にとって、これ

はまだ解決されていない問題であつた。スフィンクスは女の頭を持つてゐる。その特徴から見れば、彼女は人間で、女である。しかし、ライオンの身体を持つ点から見れば、彼女は人間ではなく獣である。尾部にある蛇の形をした尻尾こそは、野獣の淫欲を象徴している。そう考えてみると、人間でもあり獣でもあるこのスフィンクスは、一体何者だろうか。人間なのか、それとも獣なのか。これは、ハムレットの直面していた「*To be or not to be*」という発問にも似た問題である。そして、理性の萌芽が見られたばかりの当時の人間を大いに困らせた問題でもある。

スフィンクスの謎は、まさに人間をどのように獣から区別するかについての問題である。進化しつつある過程で、人間は自然選択によつて人間の外形を持つようになったと同時に、自分の体はまだ獣の性質、例えば生存本能や生殖本能が残っていることにも気づいていた。人間の頭があるからこそ、スフィンクスは自分が獣と違つてゐることを理解する。しかし、ライオンの体と蛇の尻尾が象徴する根元的な欲望は、彼女に自分が獣と違つところなど一切ないと感じさせた。外形から見れば、彼女は人間でもあり獣でもある。自分は一体人間であるうか、獣であろうか。これが彼女が最も知りたかつたことである。彼女は、質問を出すという方法によつて人間の存在に対する困惑を具体的に表明した。スフィンクスの謎は、このようにして生まれたのである。

スフィンクスによつて出された人間をめぐる謎は、人間が自己を認識しようとする歴史的な命題になつてしまつた。しかし、

人間に自分自身を認識させることを助けたこの命題の提出者は、長い間に人々に誤解され、誤読されて、人間と敵対する怪物のような存在として見なされている。スフィンクスは本来どういうイメージであらうか。彼女を怪物と見なすより、むしろ古代の人間が自分自身を認識しようとしていた象徴として、あるいは人間の本質を理解するための鍵として見たほうがいいだろう。

スフィンクスの形態上におけるもつとも重要な特徴は、人間の頭とライオンの体が一体となつた外形である。この特徴は、以下の三つを意味する。まず、これは人間にとつて形態上で最も重要なのが頭であることを証明した。これは人間の生物学的選択により得た結果である。次に、人間の頭が理性の象徴であること、つまり、長期間にわたる進化を経て生物学的選択をした後、人間の理性の萌芽があつたことを意味している。最後に、ライオンの体は人間が獣から進化してきたものであることを証明している。その段階では、人間の体にはまだ獣の本性が残されていた。われわれは、人間の頭とライオンの体が一体となつたというこの特質を「スフィンクス・ファクター」と称する。

スフィンクス・ファクターは、ヒューマン・ファクター (human factor) とアニマル・ファクター (animal factor) という二つの部分の合成である。この二種類のファクターが有機的に組み合わされ、それにより完全な人間が構成される。人間にとつては、この二種類のファクターはどちらも不可欠の存在である。ただし、ヒューマン・ファクターは高級なファクターである一方、アニマル・ファクターは低級なファクターである。

前者は後者を支配する。それによつて人間は倫理観を持った人間になる。スフィンクス・ファクターは、生物性と理性という二つの角度から人間の基本的な特徴、つまり人間の体には善悪が共に存在しているということを説明する。社会の中の人間であれ、文学作品の中の人間であれ、ともにスフィンクス・ファクターの形式を備えて存在している。獣性のみを持つ人間もないし、理性のみを持つ人間もない。宗教や道徳の經典に現れた聖人や悪魔のような存在は、学んだり戒めとしたりする手本を示すために極端に表現されているだけである。われわれは理性で獣性を抑制し、獣ではなく人間になろうとする。また、文学作品を分析する時に、スフィンクス・ファクターはわれわれに人物の複雑さを理解させるのにも役に立っている。スフィンクス・ファクターの組み合わせや変化にしたがつて、文学作品の中の人物は異なる行動の特徴や性格を現し、様々な倫理衝突を起こし、その結果、体現された道徳価値も変わってくる。

ヒューマン・ファクター、すなわち倫理観は、主に人間の頭によつて体現され、理性的意志の形で体現される。人間の頭は、人間が野蛮の時代から文明の時代へと進化していく過程で行つた生物的选择の結果である。それは、まず人間が外形上で生物的变化を経験したことを意味する。更に重要なのは、それは倫理観がすでに現れたことを象徴している点である。スフィンクスが人間の頭を持つこと、それはスフィンクス自身の体すでに人間的な特徴、つまりヒューマン・ファクターが存在していることを意味している。ヒューマン・ファクターは人間が野蛮の時代から文明の時代へと移行する過程で現れた、自分自身

の進化を促す要素である。ヒューマン・ファクターは人間性そのものではなく、人間性の種と言える。種さえあれば花が咲くように、ヒューマン・ファクターも花のように開花する。この花は、人間の人間性である。ヒューマン・ファクターがあるからこそ、人間が倫理観、そして人間性を持ち、獣から人間へと移行することが可能になるのである。人間性は、人間を獣から区別させる本質的な特徴である。倫理観はその外部表現であり、人間が善悪を弁別する能力でもある。例えば、アダムとイブはエデンの園で禁断の果実を盗み食べ、善悪を区別する能力を持つようになった。それは、倫理観があつたからこそのである。倫理観なしには、善悪を区別する能力もない。善悪を分別できなければ、人間は真の人間にならないのである。人間の頭によつて体現されたヒューマン・ファクターがあるからこそ、人間は倫理観によつて善悪を区別し、自分を動物の本能から解放することが可能になるのである。このようにして、倫理的な人間が生まれてきたのである。人間にとつて、人間の基本的な属性は、善悪を区別する倫理的特性を通して体現されたものである。

一方、アニマル・ファクターは、ヒューマン・ファクターとは反対に、人間の動物的な本能の一部分である。アニマル・ファクターは人間が進化する過程で残された動物的な本能であり、人間の体存在する獣性の部分である。アニマル・ファクターは人間の根元的な欲望に駆り立てられ、自然的意志と自由意志との形式で表現される。自然的意志はリビドー (libido) の外部的な表現形式であるが、自由意志は欲望の外部的な表現

形式である。アニマル・ファクターは人間の体に存在する非人間的な部分とはいえ、獸性と全く同列に扱われるべきではない。動物の体に存在する獸性は、理性でコントロールできない。獸だけが持つ獸性であり、獸を人間と区別する本質的な特徴である。それに対して、アニマル・ファクターは、人間が人間に進化した後もまだ体に残っている動物的な性質であり、人間が獸から進化してきたことを証明すると同時に、人間が野蠻の状態から離れ文明人になった後も体の中にまだ動物的な特質が残っていることをも証明している。人間と獸の区別は、人間が善悪を分別する能力を持つことにある。人間の体の中に存在するヒューマン・ファクターが、共に存在するアニマル・ファクターをコントロールすることができるところこそ、人間は理性を持った人間になれるのである。獸と比べて、人間の持つ最も本質的な特徴は倫理観を備えていることである。倫理観が現れてからでない、人間は本来の理性的な人間にならない。その意味で、人間は倫理的な存在と言える。

この点に関して敷衍すれば、童話の機能を分析することによって、子供の成長過程における文学の価値が分かる。なぜ童話の作者は動物をキャラクターにすることで道德についての物語を語るのであるのか。これは、理性が成熟しつつある過程で、自分自身を認識したいという子供の気持ちを考慮した上で行っている。子供の成長過程からは、スフィンクス・ファクターが確かに存在する典型的な例が見つかる。子供の成長過程は、実質的には、倫理選択をし続ける過程、すなわち、真の人間になつていく過程である。倫理選択を完成するまでに、子供はスフ

インクスと同様の存在ではない。人間と獸の区別を理解することもできないし、人間を獸と区別することもできない。どんなものが人間であるか、どんなものが獸であるかという問いにも答えられない。童話の機能は、動物という表象によって子供に自分を獸から区別させ、その区別を認識させ、それによって倫理観念を樹立させ、理性的な人間に育て上げることなのである。

三、科学選択…人間と機械との争い

人類文明の発展は、自然選択を起点とし、倫理的選択を経て、科学的選択で終わる。その内的論理こそが文学倫理学批評の基礎になるものである。自然選択の段階では、原始人は長い進化の過程を経て働くことを学んだ。そして、倫理意識が芽生え、タブーが形成され、タブーを記した文字が出現した。アウストラピテクスは、進化によって人間の形を獲得した。人間の出現に伴い、自然選択が終わり、倫理選択が始まる。形式を得た人間は、教誨によって人間の本質を得、道德的な人間となり、それによって人間は形式だけでなく本質的に他の動物と区別される。

近代以来、科学技術の急速な発展に伴い、複雑な倫理問題が科学技術（試験管ベビーや臓器移植など）によって解決されるようになった。我々は倫理選択の段階にありながら、科学選択の段階と統合されつつある。人工知能技術は生命遺伝子工学と結び

つき、人間をますます人工化、機械化していき、その結果として人間の機械化、機械の人間化をもたらす。そうすると、人間が頼りにしていた倫理基盤は、新しい倫理原則に取って代わられる。こうして、ポスト倫理選択時代、あるいはプレ科学選択時代における「人間と機械との争い」が起こった。

「人間と機械との争い」は、人間の主体性と技術の矛盾を反映している。人間と機械との戦いは、18世紀、イギリスの産業革命時にすでに出現したことがある。大機械工業が手工業に取って代わり、機械工場が手工業に取って代わった。その過程で、人間は知らず知らずのうちに標準化機械の部品のようなものになり、単調な機械労働の中で自分を失った。ここから、産業労働者のストライキ運動が引き起こされ、労働者による機械の破壊が起こった。これは、人間の機械に対する第一回目の反抗と見られる。近代工業化時代における人と機械との争いが人間の「機械化」として表現されるとすれば、現在の人工知能時代における人と機械との争いは機械の「人化」として表現できる。人工知能によって機械が機械物から知能人間になり、人間と機械の境界が完全に崩れていった。では、来るべき「時代においては、人間の価値はどのように表現されるのだろうか。AI時代に登場する「科学人」にはどのような新しい倫理原則が求められるのだろうか。

倫理選択の段階では、人間は道徳的規範をもって自らを要求し、道徳を修養し、自らの運命を握ることができる。倫理選択から科学選択への移行の過程においては、風俗習慣の上に形成された倫理道徳は科学的に検証される必要がある。科学的慣習

に合致するものだけが科学の一部として残り、科学的慣習に合致しないものは切り捨てられる。科学技術が進歩すればするほど、現代社会の倫理性は後退していく。そうなると、倫理の役割はますます小さくなり、科学技術の標準に完全に取って代わられることになる。倫理が完全になくなり、科学技術が人間社会の標準となったとき、「科学人」の世界が形成され、人類は科学選択時代に入るのである。

「科学人」は、自然出産ではなく科学的な方法で繁殖する。東野圭吾の小説『分身』で遺伝子複製技術で生まれた姉妹や、アメリカのサイエンス・フィクション『The Cloning of a Man』で体細胞の核移植によって生まれた男の子のような「人間」は、すべてが「科学人」である。科学選択段階では、人間は科学的基準に基づいて実験室で人間を作る。クローン技術をいかに習得し発展させるかは、倫理選択の問題ではなく科学選択の問題になる。しかし、プレ科学選択時代では、クローンなどの技術をどう使うかという問題や、それによって作り出される人間のアイデンティティ問題などは、科学選択の問題でありながら倫理選択の問題でもある。科学技術の発展に伴い、とくに現代人が減り「科学人」が増えるにつれ、科学選択の倫理性は失われていき、「科学人」の選択は倫理の介入を受けない本物の科学選択になるだろう。

プレ科学選択時代、人類は文学を一層必要とする。文学の広い想像力によって人類が現実で経験したことはないが将来必ず直面する倫理的問題を解決し、科学技術が人間に与える影響を予見し、科学技術と人間が入り交じった共生の問題を考える。

サイエンス・フィクションの誕生と勃興は、まさにプレ科学選択時代における倫理を表現する必要性から始まったのだろう。

現在、従来の文学理論はプレ科学選択時代の文学に適応できなくなっており、プレ科学選択時代の文学を伝統的で主観的な研究によって解き明かそうとする試みはもはや無駄である。そのため、文学倫理学批判は「人類文明三段階論」を提唱した。その目的は、プレ科学選択時代の文学作品を解析するとき、科学的原理と技術的分析を導入する必要性と合理性を論証することにある。一方、科学を基礎とする文学基礎理論の革新にも力を入れ、科学と人文の表面上での衝突を克服し、より深い統一を実現させようとする。

人文精神と科学精神は人類文明の重要な標識である。両者は相互に促進し、依存し合っている。二つの考え方が相補い、初めて人間の思考は完成するのである。両者の補完性が強調されることは、文学研究であれば科学主導の学際的な研究への転換をもたらす。文学倫理学批評は、人類文明発展の法則と文学発展の法則を尊重し、時代の流れに順応し、時代の必要に応え、文学の学際的な研究の道を揺るぎなく歩んでいる。これが、歴史の検証に耐えうる正しい倫理選択であろう。また、文学倫理学批判は、文学の学際的な研究の可能性と経路を探索するだけでなく、科学による文学の基礎理論の再構築も提唱し、文学の学際的な研究において模範を示す。

【注記】

- 1 聶珍鈞「文学倫理学批評の基本的機能と述語」「外国文学研究」二〇一〇年二月、一四頁。本論文における引用はすべて筆者訳である。
- 2 ダーウィン著、潘光旦、胡寿文訳『人類の由来』商務印書館、一九九七年一月、二〇六頁。
- 3 詳細は、エンゲルス「猿が人間になるにあつての労働の役割」「マルクス・エンゲルス選集」(巻三) 人民出版社、一九七二年、五一二頁を参考。
- 4 エンゲルス「猿が人間になるにあつての労働の役割」「マルクス・エンゲルス選集」(巻三) 人民出版社、一九七二年、五一二頁。
- 5 前掲注4に同じ、五一四頁。
- 6 前掲注4に同じ、五一三頁。
- 7 前掲注4に同じ、五一七頁。
- 8 前掲注4に同じ、五一七頁。

【付記】

本稿における中国語文献の引用は、すべて引用者による翻訳である。

本論文は、2022年中国浙江省哲学社会科学計画年度課題『「四書」の日本古典文学に対する影響研究』(22ZDJC0012)、中国国家社科基金重大プロジェクト「当代西方倫理批評文獻の整理・翻訳・研究」(19ZDA292)および「2023年中国浙江大学中央高校基本科研業務費專項資金」の助成によるものである。

(中国・浙江大学外国語学院副研究員)